

視 点

淡路人形浄るりのゆくえ

向 井 芳 樹

いつも見ているもの、身近かにあるもの、こんなものを、私達は、かえって、見ていなかったり、見えなかったりするものである。淡路の人形浄るり芝居については、今のところ、新見貫次氏の研究が、一番広く、かつまた深い。尊敬すべき先学である。

昭和三十三年に、淡路の人形浄るり芝居の一座が、招かれて、ソ連で公演したことがあった。大変評判も良かったようで、私の記憶にも残っている。

この公演の成果について、新見氏は、次のように考えておられる。

淡路人形芝居は元来農民の芸能である。労働者と農民の国ソ連で、演技の内容は封建時代のものであっても、情愛の深さなどは国情を別にして共通のものもあった。そして人形づかいが同時に働く、農民であることに彼らの親近感があった。

「情愛の深さ」の共通性は、ともかくとしても、「農民の芸能」「働く農民である」という把握が、実は問題なのである。

そうはいっても、私なども、淡路の人形浄るり芝居は、「重要無形民俗文化財」に指定されたりしているので、郷土芸能・民俗芸能の範疇に入れて、大阪の文楽浄るりとは別の「農民」の浄るり人形芝居だという風に思い、大阪の文楽に較べて、「かしら」が大きいことや、人形の振りや派手なことも、粗野で野卑な、洗練されていない農村の風を残したものだ、軽く考えていたのである。文楽が、プロの劇団だとすれば、淡路のは、アマの芝居だと思っていたのである。

今回、たまたま、淡路の人形座の一つである、市村六之丞座の座元、農田久江さんを尋ね、いろいろ話しを聞く機会を得た。八十八歳の高齢にもかかわらず、情熱をこめて、生々と、かつ楽しげに語って下さる座元の話聞いて、どうも、淡路人形浄るり芝居の実態を、私はもちろんのこと、新見さんも、とらえそこねているのだということに気が付かされたのである。

たしかに、農民や漁民を相手にしたものであり、農民でもあった人たちが、人形を遣ったりもしていたようだが、淡路人形浄るり芝居の本体は、まさに、専門の職業劇団であり、大阪の文楽浄るりの下に置かれるのではなく、同列に置いて、考えな

ければならないような存在のものなのであった。

明治二十年ごろには、淡路島には、二十を超える人形の座元がいた。明治四十年ごろには、それが十六座に、大正十五年ごろには、七座に、さらに、昭和二十四年には、五座に減少したそうである。現在は、座元の名称は三座残ってはいるが、実際に活動可能なのは、「淡路人形座」の一座のみである。

大正から、昭和にかけて、大きな危機が一度あり、それを、座元の交替などによって、かろうじて切り抜けた淡路人形芝居の座元たちは、昭和四十年代の中ごろまでは、まだ、専門劇団として興行を続けていたのである。

百貨店の郷土物産展に、アトラクションの一つとして出演したり、教材用に小・中・高校の学校めぐりをやったりするなど、興行の形態は、大幅に変えられはしたものの、まだまだ公演を待ち望む地方の観客たちに支えられて、つい最近までは、プロの芝居としての生命を保っていたのである。

本家と思われていた、大阪の文楽浄りの専門劇団の方は、松竹に見離されても、公共団体の助成があったりして、立ち直ることができた。最近では、国立の文楽専門劇場建設の声までかかっている。

文楽におそいかかった危機を、文楽の専門劇団自体は、乗り

切ることができなかった。それと同じ危機を、淡路人形浄りの座元たちは、自分たちで、それから十年以上も、持ちこたえていたのだ。興行として継続していたのである。

江戸時代はともかく、明治以降は、淡路の人形浄り芝居は、それぞれの座元たちによって、個別に支えられてきている。ほとんどの座が、淡路島を離れて、四国・九州・山陽・紀伊と巡業し、暮から正月にかけての数日間以外は、郷里の村には帰らなかったところもあったようである。まさに、専門の劇団であり、その意味で農業の片手間の仕事ではなかったのである。

やってくる観客を待つ受身の姿勢ではなく、観たいという人のあるところには、どこへでも出かけてゆく、積極的な興行姿勢が、かれらの基本姿勢だったと考えられる。そこに本来の「野掛け」の芝居の精神が生きていた。

自前の芝居だから、後継者の養成も、当然自分でやらなければならぬ。これが、淡路の座元たちに課せられた、大きな難題であった。文楽すら乗り切れなかった危機を、せっかくしのだ、淡路の生き残りの座元たちも、この難問をつきつけられて、次々といやおうなしに、終止符を打たされようとしているのである。

これが、いわゆる郷土芸能で、村落の習俗に一体化するもの

であったとしたら、芸の巧拙さえ問題にしなければ、芸能そのものの継続は、そう悲観的にならなくともよかつたはずである。そういう意味では、それぞれの座元は、地元とは離れていた。独立しているのであるから、人形浄るりの芸能を、興行と切り離してそれだけを伝承するということも不可能なのである。

現存の役者（淡路では、人形遣いをこう呼んでいる）たち以外に、自分で後継者を育てられないままの状態では、たとえば、文案のときのように、国や県が助成をしたからといって、どうも手遅れに近い。

実態が判ってみれば、現状に対してかえって悲観的にならざるを得ないのである。

ところが、昭和五十三年二月から、淡路人形座は、ニースのカーニバルに参加するとかで、ヨーロッパ公演を行なうことになっている。

これが、淡路の人形浄るり芝居再興のカンフル剤になるのかも知れないから、軽率に終息宣言はできない。

もう一度、見えたと思っていたものを、見直すことを始める必要がでてくるのかも知れない。

昭和五十三年春に、六之丞座座元の御好意により、人形蔵の調査を行なうことになっている。数百の「首」と千種を超え

る人形の衣裳と、相当な数の道具・小道具がその対象である。

野掛芝居の故に、大きくなったという人形の「首」の実態や、興行のとき特別料金をとって見せたという「衣裳山」（舞台一ぱいに人形の衣裳を飾ってみせるもの）のスケールや、三十回を超える道具の段がえしのカラクリや、いまでは、ここにだけ残っているとされる「七本鎗」用の八頭の馬など、淡路人形芝居の栄光の日のたしかな痕跡を明らかにできそうなのが、楽しみである。